

## 道徳性の育成における親子関係

—ペスタロッチーの教育関係を手がかりとして—

中島 朋紀

(鎌倉女子大学短期大学部)

はじめに

道徳性の育成は、人間が他者・社会と調和して生活するために不可欠である。子どもにおける「道徳性の芽」は、幼児期より家族や他者とのやりとりのなかで培われ、道徳性の基盤形成はまず家庭の親子関係によってはぐくまれる。家族や他者と調和的な信頼関係を築くことによって子どもは自分らしさを形成し、自分の力で外の世界へとはたらきかけることができるようになる。ボルノー (O.F.Bollnow) は、その著『教育を支えるもの』(Die pädagogische Atmosphäre)の中で、現代の教育関係が直面している諸問題を克服するためには、この自明的原理を再考することを要請する。その叙述の中で、教育思想家であり教育実践家でもあったペスタロッチー (J.H.Pestalozzi)こそ、この原理の体現者であると評している。ペスタロッチーの教育実践が示すように、彼は教育関係について深い反省のもとで教育を思索した人物の一人である。ペスタロッチーにおいて、「人間とは何か」を考察する視点は単に人間の本性が教育的要素によって特色づけられているかを分析することにとどまらず、人間が現実社会の人間関係のなかで生き生きと活動するためにはどのようななかかわりをもつべきかを探究した。そのため、彼は「居間の教育」(Wohnstübenerziehung)をモデルとして、「健全な人間の発達には信頼の雰囲気の中で活動しているときにのみなし遂げられることができる」<sup>1)</sup>のであり、真に望ましい親子関係、家庭関係に教育関係の原型を探ろうとした。

そこで、本発表では、ペスタロッチーの教育関係を手がかりとして、教育の基礎となる親子関係が子どもの道徳性の育成にどのような意味を成すものであり、その行為の当事者である親と子は、相互にどのような影響を及ぼすのかを人間形成の視点から考察しようとするものである。

### 1. 家庭における教育関係

ペスタロッチーは、家庭における「居間の教育」を人間教育の基礎においている。この居間は、人間関係のなかで「最初のかつまた最も優れた自然の関係」<sup>2)</sup>である。それは具体的には、「母親は、幼児が義務とか感謝とかいうことばを口にできないうちに、感謝の本質である愛を幼児の心に形成する。そして父親の与えるパンを食べ、父親とともに囲炉裏で身を暖める子どもは、この自然の道で子どもとしての義務のうちに自己の生涯の幸福を見出す」<sup>3)</sup>という愛に支えられた親子の「自然の関係」である。つまり、居間は道徳的な感情の端緒となる親子関係がはぐくまれる重要な場である。彼は、この居間のもつ「自然な関係」のなかに教育の本来的な在り方を示そうとし、また生活基盤の居間こそが人間教育の基礎になるものであると考えたのである。

またこれは『基礎陶冶の理念に関する見解と経験』(Ansichten und Erfahrungen, die Idee der

Elementarbildung betreffend,1807.)において、彼が「家庭生活の紐帯はその本質において愛の紐帯であり、かつこのゆえに神から与えられた愛のための覚醒手段」<sup>4)</sup>と述べているように、「家庭生活が神自身によって与えられた唯一の、真実の人間陶冶の外的基礎」<sup>5)</sup>であると考えている。つまり、彼は家庭の人間関係の本質に親と子の「愛」の契機を見出し、その「愛の関係」によって「人間教育に必要な全精神を包括する」<sup>6)</sup>のである。

では、家庭における親と子の間に具体的にどのような教育関係が成り立つのであろうか。ペスタロッチーは『ゲルトルートはいかにしてその子らを教えるか』(Wie Gertrud ihre Kinder lehrt,1801.以下『ゲルトルート』と略す)において、「どうしてわたしは人間を愛し、人間に感謝し、人間に従順になるのか」<sup>7)</sup>と自問し、それについての見解を「子どもの両親と両親に対する子どもの関係というこの中心点から出発する」<sup>8)</sup>としている。つまり、彼においてまず、家庭教育・親子関係の要件は、子どもの内部から発達するものが人間の本性に備わっており、それと父母の愛から出てくるものが一致することである。しかも、道徳感情を育てる力として父母の愛も人間の本性として内在すると考える。この『ゲルトルート』において見られるように、愛の感情は「主として幼児と母親との関係から生じる」<sup>9)</sup>のであり、「母親は子どもを育み、養い、守り、喜ばせずにはおれない。母親はそれ以外のことはできなくてそうする」<sup>10)</sup>のである。「せすにおれない」という母の愛と、子どもが自ら主体的に発達しようとする力が一致するときに道徳感情が育つのである。

このように、ペスタロッチーは教育関係の根底を家庭における親子関係に見出し、とりわけ母と子の関係の重要性を強調している。

## 2. 母と子の関係における道徳感情の発達

では、母と子の関係を成り立たせる要因としての道徳感情はどのように発達するのであろうか。ペスタロッチーは『ゲルトルート』のなかで次のように述べている。母親はまずわが子への愛に促されて、「全感覚的な本能の力によって」<sup>11)</sup>子どもを育み、養い、食べさせ、喜ばせずにはおられない。そのような配慮のもとで、「子どもは生まれ、喜び、愛の芽は子どもの心のなかに成長する」<sup>12)</sup>。そして、子どもはまだ見たこともないものを見ては驚き、恐れて泣き出すが、母が子どもをかばって胸に抱いてやり、微笑むと子どもは泣くのをやめる。そうして、「子どもは明るい澄んだ目で母の微笑みに報いる——信頼の芽は子どもの心のなかに成長する」<sup>13)</sup>。さらにまた、子どもが飢えれば食べさせ、渴けば飲ませるといったように子どもの要求を満足させてやるのが母であり、「母ということと満足ということは、子どもにとって全く同じと考えられる。——子どもは感謝する」<sup>14)</sup>ことをおぼえる。このようにして、「愛と信頼と感謝との芽はたちまち広がる」<sup>15)</sup>のであり、「母が愛する者は子どももまた愛する」<sup>16)</sup>のである。そうして、「人間愛の芽、同胞愛の芽は子どもの心のなかに成長する」<sup>17)</sup>のである。つまり、母の愛と行動とが子どもの「愛と信頼との感情の融合」を生じさせ、「感謝の最初の芽を成長させる」<sup>18)</sup>のである。このように、道徳感情の最初の段階において、母と子の本能的関係のなかで感性的なものとして育てられる。彼は、この本能的関係、感性的な道徳感情を重要視し、それ以降の道徳性の発達の基盤と考えている。

このような道徳感情が萌芽として子どもにおいて芽生えたからといって、そのことが直接的に

子どもの道徳的発達に通じるのではない。道徳的発達に至るにはある一つの契機が必要とされる。その契機は母と子どもにおける本能的関係、感性的な道徳感情の発達である。その発達を介してのみ子どもは完成された道徳性を持ち、その具現としての道徳的行動を実現させるのである。

### 3. 教育関係における「愛」の契機

では、このような道徳的発達のなかで母は子に対してどのようにかかわるのであろうか。道徳性の発達的前提である人間の道徳感情について、ペスタロッチーによれば、このような道徳感情の萌芽は「幼児とその母との間の自然の関係が啓き顕わす自我発展の最初の根本的特徴」<sup>19)</sup>である。道徳感情の萌芽は、子どものなかに自我の感情が芽生えてくることにその特徴をもつが、その本質の点では子どもが従来母を対象として育成した「愛、信頼、感謝」という人間の内的感情と外的態度と同様のものである。根本的には、神への「愛、信頼、感謝」は、原初的形態となる人間愛を媒介した「幼児と母との関係」から生じるのである。つまり、道徳感情の萌芽は、子どもの対象が母から神へ転換しても、子どもが「愛」をもって母に対する単純で本能的関係のなかで成長した「愛、信頼、感謝」という「これらの感情が発達する仕方もまた両者の場合まったく同じ」<sup>20)</sup>である。

また、子どもは自我の感情の芽生えによって、やがて母の手から離れて独立しようと「自分で感じ始め、そして彼の胸にはわたしにはもう母はいらない」<sup>21)</sup>という予感が生じる。ペスタロッチーによれば、子どものこのような精神の変化は子どもの内面における「母とは独立した自己の存在の自覚」と「生活に際してもはや母の手助けが不要になったという予感」の生起である。この二つの子どもの内面の変化を発端として神への帰依心が発達するのである。もちろん、その時母はその変化を子どものなかに読みとり、「お前にわたしはもう要らなくなるとき、お前に必要なのは神である」<sup>22)</sup>と語り、母は子どもに神の存在を確信させることを目指すのである。このような母の配慮こそが神の本質への確信を子どもに行わせることにもなり、子どもの心に聖なる感情を生起させるのである。そうして、子どもは「今まで母のために正しい行いをしたように、今度は神のために正しい行いをするようになる」<sup>23)</sup>のである。ペスタロッチーは、母のこの行為について、「自我の力の最初の目覚めを、神への信仰心によって、芽生えたばかりの道徳感情に結びつけようとする母の純情と愛情とのこの最初の試みのなかに、およそ教授と教育とがいやしくもわれわれの向上を確保しようとするなら、必ず目を注がなくてはならない基礎的な見地があらわれる」<sup>24)</sup>と評価している。

このように、ペスタロッチーにおいては、母と子の関係は全く自然な、最高の関係であるが、その関係のなかに本能的な愛の絆で結ばれた関係があり、そこで道徳感情が芽生える。しかし、その関係だけでは真の愛や信仰や道徳性は育たない。なぜなら、子どもがやがて自己の支えとなる母から離れ、母が信仰した神を見出すことが容易でなくなると、子どもは危機的状況に陥りやすくなり墮落するからである。それゆえ、その関係で芽生えた「愛、信頼、感謝」の感情が確実なものになるためにはさらなる発展が要求される。つまり、ペスタロッチーによれば、「愛と感謝と信頼との最初の芽生えが母と子との間の本能的な感情の触れ合いの単なる結果であるとするれば、今やこれらの芽生えてきた感情のその後の発展は高き人間の術」<sup>25)</sup>が必要となる。家庭における母と子の関係において、真正の信仰と愛の教育は本能的なものの克服によってはじまるものであ

り、その克服は「高度な人間の術」によらなければならないのである。

ペスタロッチーによれば、この「高度な人間の術」は、「一般に教授と教育とを一面においては曖昧な直観から明晰な概念にわれわれの精神を向上させる自然的機構の法則と調和させ、他面においてわれわれの内的な自然の感情とを調和させずにおかないような原則」<sup>26)</sup>に従うところにある。つまり、神によって子どものうちには道德感情の発達の可能性とその方向とが与えられているが、それに従って教育と教授を展開させることである。それを損なわずに保護し、伸ばす教育と教授こそが危機的状況を克服する唯一の手段というのである。そして、その手段について、彼は「母と子どもとの結びつきの自然の原因が消え失せるときに、再びその子どもに母を与えるだけではなくて、さらに技術手段の系列を母に与えることにある」<sup>27)</sup>と述べているように、子どもの危機的状況には「母自身」とその母を通しての「高度な人間の術」を与えることが克服の道であると考えている。

その教授法は「幼児と母との間に起こる自然の関係のみから発して」<sup>28)</sup>みられる道德感情の「連続的な原理」である。この連続性の原理は、「子どもの最初の教授は決して頭脳の仕事ではなく、決して理性の仕事ではなく——それは常に感覚の仕事であり、それは常に心情の仕事であり、常に母の仕事である」<sup>29)</sup>という原理である。そして、その教授法は「すべての認識の出発点を純粋に確保することと、この出発点から最後に完成されるべき目的にいたるまでの漸進過程を最も厳密に連続的なものにするのが、何よりも必要となる」<sup>30)</sup>のである。それゆえ、危機的状況を克服する技術は、連続性の原理にもとづく教育によるのであり、また道德感情の発達を連続的、計画的に支援する教育の前提においては、常に人間の感覚や心情の側面を重視しなくてはならないのである。

この教育の具体的方法としては、「愛、信頼、感謝」という内的感情と外的態度が及ぼされる対象としての神自体の存在を子どもに確信させる前提となるべき母の存在が基礎となる。彼は「母の書は子どものために神の世界を開いてくれる。……いっさいのものの中に彼女は神を示す」<sup>31)</sup>と述べているように、子どもは母親の最の純粋な愛の言葉によって自然と世界を示され、それらすべては神の創造によるものであることを知って、創造主に感謝するようになる。そして、母との関わりの状況によって、「子どもの精神的形成と道德的形成とを調和する段階の第一歩がこうして開かれる」<sup>32)</sup>のである。つまり、神の認識、信仰へ至る道は、まず母と子における感覚的、感情的側面での交わりを通して、正しい知識、心理のなかに神を啓示する子どもの教育の「精神的形成」と「道德的形成」の調和、統一が母によってなされなければならないことが基礎となっている。母の「愛」が常に教育の核心をなすものとして語られており、「愛」が「道德的形成」のみにとどまるものとしてではなく、「精神的形成」との関わりの可能性をも示している。母の「愛」こそが根源力として教育を基礎づけるものとしてあらわされている。

さらに、究極的には危機的状況を克服する法則は「自己否定の愛」である。ペスタロッチーにおいては、この法則とは、「人間は自分ひとりのためにこの世に在るのではないということ、彼はただ彼の同胞の完成によってのみ、自分自身を完成する」<sup>33)</sup>という自己否定の愛である。言い換えれば、人間は成長過程のある時期に、親を離れ神を捨てるという裂け目を生じた危機的状況が訪れるが、その状況を克服させる唯一の道は、母と子の間にある生活体験としての「安らぎ」の関係であり、また母の「自己否定の愛」を基盤とした連続的な方法によるものである。子どもの

無条件に愛する素朴な父母あるがゆえに、子どもはこの愛のなかで愛を生きようとする。そして、子ども自らもその父母が自分を愛してくれたように、自分を献げて他者を愛することに生きようとする。愛や感謝を徳目概念として知的に理解するのではなく、具体的な家庭生活のなかで父母は愛を生きることによって、父母の愛に感謝し、自らも、自分は「自分ひとりのためにこの世にあるのではない」ということを実感し、自己否定の愛を生きていくのである。つまり、家庭における「安らぎ」のある人間関係は、人間が人間として愛を享受し、愛を与えてくれるものに感謝し、自らも他者のために自己否定の愛を生きる教育の源泉である。ペスタロッチーにあっては、この人間的「安らぎ」の関係こそ自然の教育であり、人間教育の出発点であるばかりか、学校教育においても、この関係をその基礎とすべきであると主張するのである。

このように、ペスタロッチーは母の神への信仰心ないし母の「自己否定の愛」こそが子どもに神を知らせ、神に立ち返らせ、同胞のために生きる自己否定の愛を教えることになる。そして、子どもは母の愛に触れることによって、自己のなかに愛、信頼、感謝の道德感情を育成するのである。この危機的状況を克服するための飛躍を可能にするものは、連続的教育の基本形態である母と子の関係におけるこうした母の態度のなかにある。

#### むすび

ペスタロッチーは、子どもの「愛と信頼と感謝の感情」は、「主として幼児と母親との関係から生じてくる」<sup>34)</sup>ことを根底におき、それらを子どもの心に育成し習慣化しようとした。それゆえ、教育関係の営みにとって、母と子の「自然の関係」を基調とし、その中で育まれる人間的な感情としての「愛」を不可欠の前提としたのである。彼が、親子関係を教育の原点にすることは、教育関係が感覚的で感情的側面によって強く結ばれることを示しており、その感覚的、本能的契機である母の子どもへの「愛」が教育関係を成り立たせる要因である。このような母と子の相互的にかかわりは、相互に自己否定しつつそれぞれを絶対的な自己として肯定的に包み込み、その本質的契機の愛や信頼によって相互を人格的に生かし合う関係である。

親子関係における雰囲気は、相互的信頼を基盤とし、このような関係が成立すれば、子どもは親のもとで安らぎを感じるのである。このような親子関係がさらに質の高いものとなるには、人生の経験による人間の深さが要求され、この人間の深さが「愛」という善意になっていくのである。そして、そういう人間になっていくことは、自信をもって相手に関わることのできる人間である。したがって、親子関係の相互行為は、子どもも親もその異世代間の相互作用を図りつつ人間形成が成されていく過程であり、子どもも親も成長していく過程でもあるとみることができる。

註：

- 1) ボルノー著 峰島旭雄訳 『実存哲学と教育学』 理想社 1970年 237頁
- 2) ペスタロッチー著 長田新編 『ペスタロッチー全集』第1巻 『隠者の夕暮』 平凡社 1974年 377頁
- 3) ペスタロッチー著 長田新編 『ペスタロッチー全集』第1巻 『隠者の夕暮』 平凡社 1974年 370頁
- 4) ペスタロッチー著 長田新編 『ペスタロッチー全集』第10巻 『基礎陶冶の理念に関する見解と経験』 平凡社 1974年 65頁
- 5) 前掲書 65頁

- 6) ペスタロッチー著 長田新編 『ペスタロッチー全集』第8巻 平凡社 1974年 205頁
- 7) 同上
- 8) ペスタロッチー著 長田新編 『ペスタロッチー全集』第10巻『基礎陶冶の理念に関する見解と経験』 平凡社 1974年 63-64頁
- 9) ペスタロッチー著 長田新編 『ペスタロッチー全集』第8巻 平凡社 1974年 205頁
- 10) 前掲書 205頁
- 11) 前掲書 205頁
- 12) 前掲書 205頁
- 13) 前掲書 206頁
- 14) 前掲書 206頁
- 15) 前掲書 206頁
- 16) 前掲書 206頁
- 17) 前掲書 206頁
- 18) 前掲書 206頁
- 19) 前掲書 207頁
- 20) 前掲書 207頁
- 21) 前掲書 208頁
- 22) 前掲書 208頁
- 23) 前掲書 208頁
- 24) 前掲書 208頁
- 25) 前掲書 208-209頁
- 26) 前掲書 212頁
- 27) 前掲書 214-215頁
- 28) 前掲書 214頁
- 29) 前掲書 213頁
- 30) 前掲書 213頁
- 31) 前掲書 215-216頁
- 32) 前掲書 216頁
- 33) 前掲書 219頁
- 34) 前掲書 205頁